

精靈流し

岡部 耕大

登場人物

女 おばば

柴の折戸の

柴の折戸の賤が家に

翁と媪と 住まいけり

翁は山へ 柴刈りに

媪は川へ 衣すすぎ

日ごと日ごとの なりわいに

水際すすしき 五十鈴川

流れを下る 桃の実を

拾いとめしは そなたなり

かすかに、線香が匂った。

遠く、だれが弾くのかピアノから「柴の折戸の」メロディ静かに……。

浴衣に洗い髪の女が、玄海灘の夕日にくっきり浮かんだ。

女、書きかけの便箋から顔をあげる。

女

（息を殺して、つぶやくように便箋を読む）……帰ってまいりました……いえ、帰ってとは
いえないのかもしれませんが、ここで、この松浦で、こうして海を観ていますと、そちらでの、
東京でのなにかもが嘘のように夢のように思われます、昨日の夕暮れに着きました、駅か
ら私の住んでいた炭住まで逃げるように歩きました、知っている人に会いそうな気がして、
どきどきしました、宵闇の松浦は線香のにおいがいっぱいでした、八月十四日、松浦はお盆
なのです、はずかしくて、なんだかはずかしくて、顔赤らめて足早に歩いている自分がおか
しくて笑いました、知ってる人なんて、もうとっくにいないのに、たしかにここだったなと
炭住の観える峠に立った時には、もうどっぷりの闇で、風景はありませんでした、そうでし
た、よく私はその峠で夕暮れの炭住を観たものでした、大人たちの叫び声や、夕餉の鯛を焼
くにおいを、おかつぱ頭の私は別世界のように観ていたものでした、曼珠沙華がいっぱい
した、あれはいつだったのでしょうか、炭坑が閉山になって、父が泣きじゃくる私の手を引い
て、この松浦に悪態をつけて離れたのは、やっぱり夕暮れだったような気がします、どこも
東京オリンピックのファンファーレでいっぱいだったような気がします、ひもじかったこと
だけは覚えています……昨夜はそのまま小さな宿に泊りました、おばあさんが一人でやって
いる宿屋です。時代劇の宿屋みたいで、いまの私がほっとするそんな宿屋でした、今朝早く
また峠に立ってみました……なにもありませんでした、いえ、風だけが昔のままにござろ

ごろと吹いていました、炭住はとっくに解体されたそうです、解体されたままの、なにもない風景だけがありました、空と海だけが、青くすかんつとしてありました、ここにも私のふるさとはありませんでした、その峠からは晴れた日には対馬が観えて、そのずっとむこうにはうっすらと朝鮮半島が観えるのです、父のふるさとの……でも私は、ここで、この松浦で生まれたのです……あなたに会えてよかった、そう心から思います、そうです、あなたさえいてくれればよかったのです、始めは、それが女だから……あなたのおいが辛くなってしまうのです、あなたの白いハンカチからも、洗いたての白い下着からも、石鹼のおいが奥様のおいがしてる、それは、とっても白いにおいなのです、そして、その白いにおいはいつだったか会社の海の家で見たあなたの男の子の白い笑顔になって、たまりませんでした、責任はすべて私です、退職届はもう着いているでしょう

女、かすかに笑うと便箋を破る。

破れた便箋は風に飛んだ。

女

（遠くつぶやく）ほらっ、どこかでほっとしてる、したでしょう、ずるい人、ずるくしたのは私かな……よしませう、言葉にすると嘘になる……さよなら、さよならかあ、そうよね、さよならは独り言でつぶやくのがいいのよね、さよなら、あなた……（笑って）大丈夫っ、

迷惑はかけないわ、お腹の子は処置します、ちゃんと……初めてじゃないんだから、わあっ
いい風……これから精霊流しよ、松浦は、八月十五日

遠く、太鼓の音。

夕日の空に白く、パンパンと花火。

女 ……まあ、きれい

柱時計が六つを打つ。どこからNHKテレビの六時二〇分の番組が……。

西日が仏壇と喪服のおばばをくつきりと浮かばせた。

おばば 八月十五日……たった一人の

女 あっ

おばば (ぐすつと涙をすすって)んにゃあ、こっくりこっくりしよったばい

女 おばあさん

おばば (笑って)あんたが、あんまり熱心に手紙ば書きよるもんけんで、縁側で海ば観よった
ら、ついこっくりこっくり

女 ……すみませんでした

おばば ありやっ、あんた、ぽうつと顔に赤みのさして、どうじゃろかい、若さたいねえ、すうぐ元気になる（笑って）んにゃ、ひったまがった

女 えっ

おばば ひったまがった、

女 ……えっ、ひっ…

おばば ひったまがった、びっくりしたと

女 ……すみませんでした

おばば なんの、ばってあんたが担ぎ込まれた時にやひったまがった、びっくりした、まあ巡査も医者もおろおろして、いばっとなにに限っていざっちゅう時おろおろしよる、うちがあん

た、がってがりとはしてな

女 はあ、がってがりとはして

おばば がってがりとはしてたい、あのありさ、しかって、しかりつけてたいな

女 ああ、しかってしかりつけて

おばば どうじゃろかい、通訳のいるばい、こりゃ

女 ……すみませんでした

おばば ま、よか、生きとるけんで、よか

女 ……なかなか死ねないですね、人間って

おばば (笑って) 死なん死なん、人間っちゃ、なかなか死なん、うちも、こんおばばも、もう死ぬすぐ死ぬば口癖にして、もうかれこれ(また笑って)ほいっ、生きとる、まあだ、死なん死なんっ、なかなか女ごっちゃ死なん死なんっ

女 ……女は

おばば 女ごは死なんぞ、なかなかのう、男はあんた、ころっと逝く、ころっと、ばって、女ごは死なん、んにゃ、死ねんっ、死ぬにも死ねん、死んだらあんた、女ごの負けよ

女 ……

おばば むかし語りになりけり、ちゆうてな、あんたの今日も、明日になれば、むかしむかしで、おしまいたい、よかことも悪かことも、なつかしゆうなるだけたい、んにゃあ(笑って)

あんた、八月十五日の、盆のむかえ火に誘われたごと、こん松浦に

女 ……東京オリピックの年でした、たしか、この松浦を離れたのは…、父と二人で

おばば ここで、こん松浦で生まれたとな

女 松浦で…でも、もう私の松浦はありませんでした、火のように激しい松浦でした、男は命と血におびえたように生きていました、女は命と血をうらんで生きていました

おばば じゃったなあ、じゃったじゃった

女 明日はなか、父の口癖でした、この松浦で…離れたその日から、松浦を忘れろ、が父の口

癖になって、忘れないままに、父はどうとう、大阪の飯場で（笑って）大阪でも松浦弁の父
でした、いつも私をがってがりとはして、私は大阪で中学を卒業しました、それから東京へ、
大阪の飯場で死んだ父の形見は、この松浦で炭坑のエントツをバックに胸張っている一枚の
写真だけでした、もうなくなってしまう松浦です

おばば　ほんに、ひっそりした松浦になってしまおうて

女　∴風景って、すぐなくなるものなんですね

おばば　ここに、こぎゃんしておつと、ずるずるずる風景の音のすつと、くずる風景の音
の

女　でも、よかった

おばば　なんて

女　松浦を観て、よかった、松浦を観て、なんだかすつとした、もう私の松浦はなかった、ここ
に、この松浦には、もう私の松浦はなかった∴∴帰ってこない私の松浦

おばば　（笑って）ほかに宿屋もあつたらうに、よりによって、こぎゃん

女　おばあさんがいたから

おばば　なんて

女　ほらっ、そこでそうして、縁側から、垣根越しに海を観ているおばあさんがいたから∴∴な
んだか、昔そうしているおばあさんがいたような気がして、この松浦で、昔そんなおばあさ

んを観たような気がして

おばば ……こん松浦の夏なあ、堪ゆることとでござす、堪えて、息ば殺して、それぞれに生きる
しかなかとでござす……動かんで、ひっそりと、八月十五日の、今日の精霊流しば待つとで
ござす、一人びとりが一人でなあ、たった一人で……あん葉なあ、にかかったろうに

女 睡眠薬です、父が死んで一人になって、東京での生活の、そんな東京での一人の生活の癖に
なって（笑って）なにもない、なくなった松浦を観たら……ぐっすり休みたくなって

おばば ぐっすりやあ（笑って）なんの、急がんでん、あつ、ちゅう間たい、人の一生なあ、急
がんでん

女 ……

おばば ほんに、松浦に棲む人なあ、堪えて、八月十五日の精霊流しば待つしかなかとでござす、
今日の、今日の八月十五日ば境にして、こん松浦なあ秋になる、びしって風の音のして、曼
珠沙華の、彼岸花の、肥前花の……秋になるとでござす……（ため息）曼珠沙華ば、滅びの
血の色ってにや、だりがいうたか知らんばって、よういうた

女 ほんと、なにかあると曼珠沙華があった……滅びの血の色のように

おばば 腹は

女 はっ……あの、いえっ

おばば ひもじゅうはなかとや

女 いえ、あの

おばば なんの、たった二人遠慮はいらん

女 いえっ、そうじゃなくて、ほらっ、海に夕日が沈んでるのが、私、たしかに、どっかで観た風景のような気がして

おばば ……あんっ、夕日のおこうが朝鮮半島

女 ……そうかもしれない、この松浦で、父と観た風景なのかもしれない

おばば ……堪ゆることとでござすよ、あんた、堪ゆることにや馴れっこけんで、松浦の女ごなあ女 おばあさんは、いつも

おばば なんてな

女 いえ、いつも垣根越しに海を観てるんですか、こうして

おばば 考えよると、いつてん

女 なにを

おばば 女ごのふるさとっっちゃどこじゃろかい、生まれたとこや、嫁いだとこや、子供ば生んだとこや、死ぬとこや

女 ……

おばば (笑って) 無口の季節でござす、八月なあ、八月なあ無口の季節でござすよ、無口の季節なあ思い出の季節でござす……年寄りたちや、ひっそりと、それぞれがそれぞれに、それ

それぞれの棲み家で、息は殺して生きるとでござす、それぞれの思い出に浸って……今日も、八月十五日……夢ならば

女 えっ

おばば 夢ならば覚めんでおくれってつぶやくたあ、こりが夢ならばなあってつぶやくごと、むなしかむなしか

女 ……夢ならば覚めないでって

おばば そう、そぎゃん時もあつた

女 ……これが夢ならばって

おばば そう、そぎゃん時もあつた

女 ……夢ならば

おばば (笑って) むなしかむなしか、あんた、精霊流しに行^いてごろうじまっせ、ありや松浦にやこぎゃん人のおつたとかなあつて、人の、人の中の人の、一人びとりの、びっくりするごと人の、あんた、そろそろそろそろ、生きとればどうにかなる生きとればって、念仏のごとつぶやいて、そろそろそろ……精霊ば流す

女 精霊流し

おばば そう、精霊流し……一人になって……たった一人の

女 ……一人になって……たった一人の……人がいっばいなんです東京って、いっばいの人がい

っぱいの人の中で、人が人に疲れて、ほんとにぐったりして、いっばいの方は、一人一人に電車を降りるんです、いっばいの方が無口になって、それぞれに帰るんです、私食堂で一人食事をしている女の人って好きじゃないんです、だから、お肉屋でコロツケとか……ああ

おばば　　なんや

女　夕日だったわ、やっぱり……でもこんな夕日じゃなくて、もっとぼやけて、ぼんやりした夕日だった、……そう、夕暮れなの、アパートにはだれも待つてはいない、父の写真があるだけ、窓には昨日の夜洗ったまんまの下着がそのまま……なんでこんなことしてるのかなあ……て考えちゃう……そんな時です松浦を想うのは……松浦は私のイメージの中で、大きくなるの、すばらしくなるの、そう、まだ父も母もいた、あの松浦です

おばば　　母さんなや

女　母は……母は、逃げたのです、父と私から、しようがないんです、それは、母親も女だからおばば　　そうな

女　だれでもよかった、そう、だれでもよかったのかもしれない、あの人じゃなくても、そうよ、だれでもよかったのよ、そんな私を、うじうじ松浦を想っている私を消しとばしてくれる人なら、私の部屋でビールを飲んで、おいしそうにお肉を食べてくれる人なら、だれでもよかったのよ、女は、女は、一人にはなれないのかもしれない

おばば　　だいでよよかったってや

女 かもしれない

おばば 女ごは一人にやなれんってや

女 ……嫌になるぐらいいやらしいの、あたしって、それから、それからあの人の来ない夜はいらいらして、苛だつて、あれやこれやって、あの人のあることないこと想つて……電話したことがあるわ、あの人の家へ、明るい声で話そうと思つていた、公衆電話のボックスから……でも、電話の声は、あの人の奥さんの声で、そのむこうでははしゃいでいるあの人の声にして、黙つて電話を切つていたんです、たまらなくて……たまらなかつた、暖かい夕食のにおいがしたみたいで……そしたら、忘れていた私の松浦を想いだしていたんです、父と母と私との夕餉のにおいのするあの私の松浦を……たまらなかつた、歩いたんです、わたしの冷えた身体がわたしではどうしようもなかつた

おばば だいでよかつた

女 暖めてくれるのなら、温かい言葉のある人なら……夜の街をふらふら歩いている女、私、そんなつもりじゃ、そんなつもりじゃないつもりだった、でも気がついたら、そんな私に声をかけてくれた男の人とお酒を飲んでいたわ、私

おばば ありゃ、ほうりゃ、海のむこうに夕日の沈みよる、あいたこりしよ、どっこいしよ、今年の八月十五日も……おわつたのう

女 ずるずるだった、その日からその男の人がアパートに来るようになったのです、だれでもよ

かったのです、あたしが、あたしのアパートが暖かくなって、暖かいにおいさえすれば

おばば ずるずるたい

女 えっ

おばば ずるずる、なんもかんも、ほうりゃ、夕日の沈みよる、あん海のおこうに、あん海のおこうに大陸のござす……おかし

女 えっ

おばば おかしむかしな

女 ああ……昔

おばば そう、おかしむかし、戦争のござした……写真結婚って知っとるや

女 写真結婚

おばば 写真結婚、おかしむかし、こん松浦に男のおらんごとなつてしもうた時代のござした

女 ……

おばば そりゃ太か戦争でござした、男衆なあ、だいまかいも大陸へ大陸へって毎日あんた、駅にや旗のいっぴゃあ、軍歌のいっぴゃあ……娘はあんた、だいまかいも同じカツコで、だりがだりにいろもわからんごと（笑って）ほんに男の衆のやるこたあ、同じ髪型で同じカツコば娘にさせて……どうしたっちゃ女ごは女ごたい……鬼の棲んどると女ごの中じゃ

女 鬼が

おばば 女ごっちゅう鬼ののう、そいが女ごばうずかする（笑って）写真結婚、死んだ連れ合い
なあ、大陸の、なんじやろかい、ごてごてしとるもんばバックにして、こぎゃんして、いば
ってな、仲立さんの話じゃ、なんてろっちゅう開拓団じゃった、大陸の、うちもあんだ髪ば
ゆうて（笑って）写真のうちは、あんだ、うちじやなかごたるうちじやった、死んだ連れ合
いに会^おうたたあ、式の、そん日、結婚式の

女 まあ

おばば うちや、しみじみそん人ば見て、ほうこん人が今日からうちの連れ合いになる人な
な、写真より顔のひどかぞって

女 （笑って）

おばば うちの人も、そぎゃん顔してうちば見よった、しみじみ、互いで、顔見合わせて、こり
やだまされたっ

女 まあ（笑う）

おばば ほんに、だいでもよかった、ばってまあ大陸からわざわざ、うちば嫁ごにする為に、う
ち一人の為に、こん日本に、連れ合いなあ帰ってきた、そこに感動したとたい、娘心にも、
まあ、あわただしゅうしてあわただしゅうして、そりでん四、五日はおったじやろかい、連
れ合いなあ、ここに日本に、ちゃんとして迎えに来るっちゅうてな、大陸でちゃんとしてっ
て（笑って）あん人も、だいでもよかったとかもしれん……四、五日して、あん人なあ大陸

へいった、んにゃ、帰った、こん松浦は振り返り振り返り……なんもなか、人なあ離ると
なんの音沙汰もでけん時代で、うちゃたあだ待った、ここでじっとして

女 (ため息)

おばば そりでん、連れ合いから手紙のくる、たあまに、思い出したごとばって、つまらん、に
おいでわかる、嘘の

女 において

おばば ない、泣こごとなるごたる嘘の、ようも悪うも人なあ嘘ばつく、知らず知らず

女 知らず知らず

おばば そうたい、よかれと思う嘘もある、んにゃ、嘘っちゃ、よかれと思うてつくもんたい、
やさしか人が嘘をつく

女 やさしい人が

おばば (笑って) やさしか人が……連れ合いの手紙にゃ、あんた、よかことばかり、あん海の
むこうなあ、大陸なあ、別天地のごと、よか話ばかり、ばって、あんた、その手紙の黒か墨
からにゃ、におうとよ、不幸のな、苦勞のな、絶望のな、においてわかるとよ嘘の、悲しか
嘘の(笑って)して、手紙の仕舞いにゃ、必ず、必ず、貴女様だけが頼りにて候信じあげ候
って、必ず、判で捺したごと、必ず……うちゃあんた、そん手紙の返事にな、こいも嘘で固
めて、夢んごたる嘘で固めてな、どっちもどっち、ばって、どっかで、あん人は、あんなだ

けはって信じて、あん人も、うちは、うちだけはって信じたとでっしよ……離れたら仕舞いでござす、人なあ、人なあっそぎやんに強うはござっせん、人なあ、人なあ、心と身体とことばと、ばらばらに生きとる物でござす（唄うように）心は身体に嘘をつく、身体はことばに嘘をつく、ことばは心に嘘をつく

女

そう、嘘をついていたのかもしれない、あたし、もうあたしばらばらになってたのかもしれない、その人にも嘘をついていたし、あの人にも嘘をついていた、どっちにも嘘を、知らず知らず、でも、そうでもしなきゃ、わたし、わたし……雨の夜でした、突然あの人 came の、酔っぱらってなん度もなん度もドアを叩くの、あたし、いえ、あたしたち蒲団の中にいたんです、おびえて……あたし、おびえながら、どんな嘘をつけばいいだろうてそればかり考えていたんです、この人にはどんな嘘を、あの人にはどんな嘘を……あの人雨の中を帰っていった、アパートの下の道路を、暗闇のあたしの部屋を振り返り振り返り……あたしほっとしたような、追っかけていたいような、でもあたし……私ぺらぺらと嘘をしゃべっていた、蒲団の中でタバコを吸っているその人に、嘘でもいいから、嘘でもいいからって縋るような目のその人に、その人がこうだったらいいと思っっているような嘘を、またそんな嘘を、いえ、もう自分では、もしかしたらこれがほんとなのかもしれないって思うほどのそんな嘘を……闇のガラス窓のむこうに映っている私の姿が、母そっくりでした

おばば
……

女 ……においがあつたんです

おばば なんてな

女 においが…あの人が酔っぱらって来たよく日、私あの人に、嘘を、あの人がこうであつてくれて願っているような嘘を…あの人が信じてくれたのかもしれない、いいえ、信じたくないから、そう私がそんな女だつて信じたくないから、だから、だから信じたのよ、きつと、私の嘘を…においがあつたんです

おばば なんてや

女 あの人、きたんです、その夜アパートに、においがあつたんです、部屋に、蒲団に、灰皿に…私の…私の身体に…あの人が信じてくれないにおいが…嘘つてに置いてバレルものなんです

おばば そう、嘘なあ、に置いてばるるもん

女 あの人、笑つてました、悲しそうに笑つてました、立つたままじつと部屋中を見回して、嘘をついたなつていいました、私蒲団の中で、冷えていく自分の身体を感じていました、服を着るその人をじつと見たまま、もうどうでもよくなって…あの人が、いけないのはほつたらかしたいた俺なんだなつて、そうじゃない、そうじゃないんです、忘れたかつたから、もう忘れたくてたまらなかつたから、だから、だから私、忘れられなくて、ああでもしなげや忘れられないから…だから…あの人もつとうまくコントロールしてくれればよかつたん

です、私と奥さんと……ゆるす

おばば　なんて

女　ゆるすって、あの人がいたんです、ゆるしちゃいけないのに、ゆるしちゃいけないのにゆるすって、私殴って欲しかったのに、私、私の身体をめちゃくちゃにして欲しかったのに、なのに、あの人が、ゆるすって

おばば　そうなあ

女　私、終わったんだなって思ったんです、あの人のなにもかもが終わったんだなって、めちゃくちゃになって欲しかった、めちゃくちゃになって私をめちゃくちゃにして欲しかった、なのに、ゆるすって

おばば　殺されてもよかった、なあ

女　殺されてもよかった……そのまま帰ったんです、帰っていったんです、そうなのよね、あの人が帰れる人だったのよね……帰れるとこのある人と、一人であの人のにおいの残っている冷たい蒲団にいる私……松浦が、忘れていた私の松浦がそんな私の中で、またいっぱいになっていたんです、私だけの松浦、私だけが知っている松浦、私だけのイメージの松浦、よく朝、私は東京駅の観えるビルの屋上に立っていました、新幹線が早朝の青い空気を震わせて、まるで白い生き物のようですねって消えていくのです、その消えていくむこうには松浦がある、私の、私だけの松浦がある、すると、ビルから観る東京の街が、海になって、松浦の海にな

って……私……帰って来なければよかった

おばば ……身籠った

女 えっ

おばば うち、身籠ったとよ、赤子ば

女 (ため息)

おばば ……八月十五日ば終戦ってにや、だりが決めたといろ(笑って)粹な人たいそんな
あ、酷な人たいそんななあ、だいかいも無口になってひっそり死んだ人ば、死んだ昔ば想
いよる八月の、精霊流しの十五日ば、終戦って決めた人なあ、粹な人たい、酷な人たい

遠く、鉦と太鼓。

花火、近く。

波……。

おばば ほんに、ごった煮のごたる松浦でござした、昭和二十年八月十五日

女 もう……父はいました、松浦に……強制連行

おばば そう、ごった煮のごと、こん松浦に、どっからもかしかつからも、あん半島からも、そう、
そうたい、だりもかりもがこん松浦に……知つとるや

女 ……えっ

おばば　こん松浦の炭坑なあ海底掘りでござす、あん半島にむかって掘るとでござす、男も女ごも、裸になって、まっ黒になって、ごちゃごちゃごった煮になって掘るとでござす

女　父もその一人でした、掘ることで、半島に向かって掘ることで、父は祖国へ近づこうとしていたのかもしれない

おばば　夢のごと、過ぎてみれば、夢のごと、なあしあぎゃんに、なんかに憑かれたごと、戦争戦争って

女　……哀号、そんな父の寝言を聞いたことがあります

おばば　うちゃそんな血の流れよるごたる風景ば、生まれたばかりの赤子ばうだいて、こっからぼんやり観よったと

女　……その中のひとりに父もいました

おばば　昭和二十年八月十五日、こん松浦の、んにや日本の、日本中の青うに透き徹って、白っちゃけて、ラジオの音のガアガアガアガア、戦争なあ終わった、戦争なあ負けたって、ガアガアガアガア……日本の、日本中の、白うに呆うけて……明日はなかごと白うに呆うけて、しんっとした松浦じゃった

垣根のおこうを、はしやぎまわる子供たちの声。

女 まあ、きれい、ほら、子供たちが浴衣でいっぱい、ほらっ、おばあさん、廻り燈籠があんなにいっぱい、螢みたいにいっぱい……私がいる、ほろ酔いの父に肩車されて精霊流しにはしゃいでいた、おかつば頭の私がいる、七つか八つの私が

おばば ……人ば殺したことのある

女 えっ

おばば 人ば殺したことのある

女 ……おばあさん

おばば んにや……人ば殺したことのある

女 そんな

おばば そう、七つか八つの男の子じゃった、昭和二十年八月十五日、今日そん子の命日でござす

女 おばあさん

おばば あん時代ば生きた人の、人一人殺さんじゃったっていいきる人のおるじゃろかい、あん時代ば生きて、生き残っとる人の、人一人殺さんで生き残るるじゃろかい

女 なぜ、私にそんな話を

おばば なあしじゃろかい、ゆうらゆうらしとるこん線香のにおいのせいじゃろかい（笑って）

あんたのせいじゃろかい

女 私の

おばば こん八月十五日に、こん精霊流しの日に、こんおばばはなぐさめてくれよるあんたのせいじゃろ

女 なぐさめるだなんて、私

おばば んにゃ、あんたはうちばなぐさめてくれよるとよ、いままでなあ、いままでの八月十五日なあ、うちやこつからこぎやんして海は観て、精霊の海に流るとば観て、夢のごと、過ぎてしもうたいろんないろいば、うつつらうつつら想うだけじゃった、たった一人で

女 一人で

おばば 大陸のあん人に見籠ったとば便りしたら、あんた、喜うで喜うで、忠義ちゆうぎ

女 えっ

おばば 名前、子供の、忠義ちゆうぎ、忠義ただよし

女 赤ちゃんの

おばば 忠義ただよし、うち、うちや好かんかった、なんが忠義ちゆうぎな、のう

遠く、「柴の折戸の」メロディ静かに。

おばば ありや、柴の折戸の、じゃろ

女 ええ、柴の折戸の

おばば なつかしさあ、そう、そうじゃった、こりや関東から流れてきた唄じゃった、こん松浦で流行り歌のごとなつて（唄う）柴の折戸の賤が家に翁と媪と住まいけり

女 （唄う）翁は山へ柴刈りに媪は川へ衣すすぎ

おばば 知つとるとや

女 ……よく母が、私に唄ってくれました

おばば 母さんが

女 はい母が……逃げた母をうらんだものです、この子守り唄を歌いながら

おばば そう、こん子守唄ば聴きながら、あん子も、忠義も死んだとでござす、ほりや、あの位牌が忠義でござす……（狂つたように）のう、忠義よい、盆でこん松浦のこん家に、帰あつてきとるとじゃろ、忠義よい、ぬしや知つとるじゃろ、のう忠義よい、母ちゃんの、心のどつかで、ぬしの死ねばよかについて願ひよつたとば知つとるじゃろ、ぬしば殺したあ母ちゃんぞ

女 おばあさん

おばば 忠義は、生まれた時から弱か児じゃった、なんとかちゆうむつかしか病気でな、ずっと床の中じゃった

女 ……

おばば あん日、二十年八月十五日、床の中でせえせえいよる忠義にあん子守唄ば歌うてやりながら……こん子死ねばよかたってな、思ったよ

女 おばあさん

おばば (笑って) しょんなか、あん人の子じゃなかったけんで

女 !………

おばば 戦争の終わった、あん人の帰ってくる……こん子死ねばよかのに……忠義はそいば知ったごと、そん日ひっそり死んだ……うちが殺したと(笑って)鬼の棲んどる女ごの中に、女ごっちゆう鬼ののう、相手の忠義の父親の顔も名前も忘れてしもた、ばってほてった身体は覚えとる、いまでん

女 ……ほてった身体は

おばば (笑って) なあしあぎゃんことばって、明日はなか、そう明日はなかごとのたうってのう、なんの過ぎてしまえば明日はある、ちゃんと、生きとれば、生きとりさえすれば

女 生きてれば

おばば そう、生きとれば

女 あの

おばば なんや

女 ……御主人は、それで、あの

おばば 死んだ

女 えっ

おばば 死んだ……（強く）満州

女 ……

おばば 撫順、ロコ島埠頭、日本へ引き揚げのその日、死んだ

女 なんて、また

おばば 知らん、よう人の死んだ時代けんで、ほっぽらかしにされたとでござす、あん人なあ、

満州で……（笑って）たった四、五日

女 えっ

おばば たった四、五日、あん人とうち

女 ……ほっぽらかし

おばば そう、いつでん知らん人がほっぽらかしになるとたい、日本でほっぽらかされてあん人

なあ、満州へ、して満州でほっぽらかされて死んだ、ほっぽらかされて死んだ、うちばほっ

ぽらかして死んだ

女 ほっぽらかされて

おばば よう人の死んだ時代けんで、ほっぽらかされたままに、ほっぽっらかしたまんまに

女 ほっぼらかされたまんまに

おばば 強かもんが、弱かもんば、ほっぼらかす、いつでん

女 父もほっぼらかされたまんまに死んで

おばば ハルピン、長春、奉天、撫順、してロコ島、ほっぼらかして、ほっぼらかされて、あん人なあ、して死んだ、ほっぼらかされて死んだ、とうとう、(笑って) たった四、五日で、もう後家さん、さあそりからたい、働いた働いた、もう働いて働いた、忘るごと忘るごと、つて、朝から晩まで、朝早ようから晩遅うまで、ばつて、こりがなかなかどうして、なああ

女 はい

おばば どうにもこりが、なかなかどうして、忘れたかあつて念じるじやろ、忘れたかあ忘れてしまいたかあつてな、すつと、こりがなかなかどうして忘れられん(笑って)で、忘れとうなか忘れとうなかつて念じとるこたあ忘れとる、ころつと

女 おばあさん

おばば そりが人生…のごたる、あん人の両親と、こん家で、あの人の両親なあ朝な夕なに、あん人ば忘れとうななあ忘れとうなかつて仏壇に手ば合わせよる、うちやあんた、忘れたかあ忘れたかあつて働いて…：：：たった一人になってしもうた、だいまかいもお位牌になつてしもうて…：：：今日はひっそり帰あつてきとるじやろ、なあ、あんた、忠義、おるとじやろ、こ

ん家のどっかに……女ごのふるさとっちゃん、どこじゃろかい

女 えっ

おばば 女ごのふるさとっちゃんどこじゃろかい、生まれたとこや、嫁いだとこや、子供ば生んだとこや、死ぬとこや

女 ……ふるさと

おばば とうとう、こん松浦から離れんずく、死ぬまで、とうとう……ほうりや、精霊流しの、ほうりや始まりよる

女 わあっ、海に、あんなに、火が、火がいったい

遠く「どどど、どどどうんっ」と花火。

遠く「わあっ」の歓声。

おばば 過ぎた、過ぎてしもうた

女 ……（ため息）

おばば 今年の夏も、八月十五日も、過ぎた、過ぎてしもうた、精霊の流れよる、来年まで、来年の八月十五日まで……三百六十五日

女 わあっ、こんなに、線香のにおいがこんなに、どこからも、いったい……いいにおい……あ

っ 螢、おばあさん、ほらっ 螢が、あんなに

おばば ほんに、いっぴやあ、魂のごと、死んだ人の魂のごと

女 わあ、海、ほらっ、おばあさん、海に

おばば ……ほんに、精霊流しの……流れて

女 精霊流しの……流れて

おばば 流れて……ゆうらゆうら流れて、海のおここの、ずううつとおここの間に……死んだ人の魂のごと、ゆうらゆうら流れて、流されて

女 きれい……私の松浦

おばば あん精霊、流れによる精霊のいっちは、あんたの父さんかもしれん、こけえこぎやんしておるあんに、松浦におるあんにほっとして、あんたのお父さんなあ、流れて、流れていきよるとかもしれん

女 ほっとしてるでしようか

おばば 今年の夏も過ぎよるたい……八月十五日の過ぎよるたい……年々歳々薄うなりよる八月の十五日の過ぎよるたい……忘れんでおくれって過ぎよるたい

女 ……帰ってきて……よかった

おばば いつ身籠ったとな

女 えっ

おばば 赤子ば

女 おばあちゃん

おばば よか、よかよか

女 だれの子かは、知っています、私

おばば じゃろ

女 生みたい

おばば じゃろ

女 生むのが……怖い

おばば (笑って) 生めばよかと、けろっとして

女 だけど

おばば 生きとれば、生きとりさえすればなんとかなるけれど、人なあ、女ごなあ

女 ……生きてれば

おばば ほんに、人の命の安か時代でござした、一人また一人、生きとるとの悪かごと、よう死んで、ま、ばって、いまになってだりば恨むことも詮な話、恨むなら自分、あぎゃんことばした自分、死んだ人も生きとる人も、恨むなら、自分……とうと、待つことだけの一生じやったごたる、とうと

女 えっ

おばば ずるずるずるずる、待つことだけの一生じゃったごたる、ここでこうして、だりかの、
なんかの、どぎゃんかしてくるとば待つしかなかった、……そう

女 えっ

おばば 女ごは不幸になる自分ば待つとるじゃなかるかい、楽しみよるとじゃなかるかい

女 そんな、楽しむだなんて

おばば あんた……あんたも楽しみよるとじゃなかるかい、めちやくちやになりよる自分ば、そ
ん人の子ば身籠った自分ば、死ぬことば考えよる自分ば

女 おばあさん

おばば (笑って) 人の死ぬじやろが、あんた、お悔みのあるじやろが、あんた、そぎゃん日に
や朝からわくわくしとる、人なあ人の死ぬとのうれしかとよ、どっかで、なあ、あんた(笑
って) あんたが担ぎ込まれたろうが、巡査も医者も、おろおろしよる、おろおろしながら、
どっかで楽しみよる、あんたのいろんないろば推測してな、楽しみよる、わくわくしよ
る、あんたの死ぬとば楽しみよる、(また笑って) 人なあ人の死ぬとのうれしかとよ、どっ
かで、そりが……そりが親でん、子でん、連れ合いでん

女 ……死んでくれればいいのについて、思ったことはあります

おばば ……だりがや

女 ……あの人

おばば ……じゃろ

女 ……いえ、いつもそう思っていたのかもしれない、そう、あの人の葬式を、遠く離れて、一人ぼつんと観ている、そんな自分をいつも思うことがありましたもの……いまでもそうかも
しれない

おばば (笑って) ほんに、男は死んでくれんどの、そん日が女ごの見せ場じゃけん……一世一代の……生まれたけん死ぬ、死んだもんが負け……ずるずるでん生きとったもんが……そう
生きとったもんが

女 生きていたものが

おばば (泣いた) 死んでよか人の、よう死んで

女 おばあさん

おばば 生まんばたい

女 えっ

おばば そん子ば生んで、生まんばたい

女 ……

おばば 人は、人の命は、人の思うごとやワじゃなか、命根性しつかと強かなら一人ででん生きるとよ、ほっばらかされてでん……生みない、ここで……こん松浦で

女 ……私

おばば 殺すの死ぬのは、生んでからたい、生まれてからたい

女 ……私

おばば ごろうじ、むかし、むかしむかし、ずううつとむかし、こん松浦からあん対馬、対馬からあん半島、陸続きじゃったっていうじゃござっせん、馬の、いっぴやあの馬の渡ってき たっていうじゃござっせん、こかあ松浦でござす、肥前松浦でござす、まあだいっぴやあの馬のいななきのする、半島の観ゆる、ごった煮の松浦でござす、のう、あんた

女 はい

おばば ごちやませで、ませこぜで、ごった煮で、ごちやごちやしとるとでっしょうな、うちの血も

女 血

おばば こっから、こぎゃんして海ば観ると、なんじやるかい、わからんごとなつてな……人なあ……人なあ自分がなんかもわからんまんまに、生まれて死ぬと

女 自分が

おばば そう、自分が……あんたはなあしあんたな、あんたはなあしあんたに生まれたとな……海ば観ながら、いつでんうちや考ゆる、うちやなあしうちじやるかい、うちやなあしこけえおるとじやるかい

女 えっ

おばば　　うちゃ……なあし……うちじゃろかい……うちゃ……なあし……こけえおるとじゃろ
かい

女　　うちゃ……なあし……うちじゃろかい……うちゃ……なあし……こけえおるとじゃろかい

おばば　　（笑って）そいば考ゆつとな、頭のずきずきしてな、なんじゃろかい、なんもかんもの
アホらしゆうなつてな（また笑って）人は、人ちゆうもんは、おかしか、おもしろか

女　　（笑って）ほんと

おばば　　おもしろかるが

女　　（笑って）そう、そうなのよね

おばば　　そりが人たい、そうしたもん、そりが人生、あっちはあっち、こっちはこっち、やさし
ゆう嘘ばつき合うて生きるりたい

女　　どっちも、どっち

おばば　　そう、どっちもどっち

女　　（笑って）私……私あの方は私だけを想ってくれるようにって（笑って）でも、私はいっぱ
いの人に想われたかった

おばば　　そりが人たい

女　　（笑って）私の浮気はゆるせても、あの方の浮気はゆるせない

おばば　　そう、どっちもどっち（笑って）ゆるゆるずううつと、こん年まで生きるとの、人の不

幸も幸せも、恨みもつらみも、なんもかんもおもしろ噺、滑稽滑稽、悲しか悲しか

女 そうなるかしら

おばば なるごと生きんば女ごの損、なるさ厭でものう

女 厭でも

おばば 長う生きてごろうじ、生きんばつまらん、長う生きる喜びば神様のくれたとよ、女ごに

女 女に……女だけに

おばば そう、女ごに、男はあんた、男の喜びは、あんた、ちょびつと

女 えっ

おばば ちょびつと、あっちゅう間たい、女ごはあんた、なんでん喜びにするとよ、長う長うか
かってのう、ここで、あんたの生まれたこん松浦で、生きてごろうじ、ほっばらかされたこ
ん松浦で生きてごろうじ、子ば生んで生きてごろうじ、ほっばらかされてでん、観ることな
あでくる、語ることなあでくる、して、あんた、子に語らんばいかん、観たことば、自分の
したことば語らんばいかん、おもしろ噺にしてのう、こいからどぎゃんなるか、こん松浦の
どぎゃんなるか、ようと見とってごろうじ

遠く、「柴の折戸の」のメロディ静かに。

おばば あいたりしよ、どっこいいしよ、あんだ料理は上手かや

女 えっ、あの、いえ、あまり

おばば よか、うちがたっぷり仕込んでやる……明日から

女 明日から

おばば そう、明日から、たっぷり語ってやるけん、おもしろい

女 でも、私、あの、迷惑じゃ、あの

おばば (笑って) こんおばばの黙っとるけん、こん松浦はおとなしゅうしとる、だりもかりもうちの死ぬとば待っとるとよ、松浦な、忘れとらんとに忘れたふりして生きとるとでござす、松浦なあ、あん時、どこのだりが、どこのだりばどうしたか、だりがだりば、ほっぽらかしたか、ほっぽらかされた人なあ、どうしたか(笑って) 知っとる人の黙って死んでゆくたんびにほっとしよる、松浦なあ、ほっとしよる、そんな人もやがて、語らんで死なんばいかん、うちゃそりば知っとる、松浦のなんもかんもば知っとる、うちの死ぬとば待っとると、松浦なあ、死ぬか、のう

女 まあ

おばば 生きとれば、傷のいっちょふたつはだりにでん、ありや風の、すずしさあ……秋になりよる……どうにかなる、生きとれば……腹のへったろう、あんだ

女 えっ

おばば 腹の

女 あっ、ええっ

おばば どりゃ、茶漬けば、いっちよ

女 おばあさん

おばば なん

女 ……いえ、いいんです

おばば ああ……夢んごたる

女 えっ

おばば 夢んごたるよ

女 あっ

おばば んっ

女 海が……ない

おばば ……精霊流しのおわったごたる……女ごのふるさとっちや、どこじやろかい(つぶやく)
生まれたとこや……生きたとこや……死ぬとこや……いっちよずつ、火の消えよる……ぽっ
んぽつんって……精霊舟の火の消えよる……いっちよずつ

女 唄う、「柴の折戸の」。

おばも和していた。
過ぎる夏への、鎮魂歌であった。

底本

『精霊流し 岡部耕大戯曲集』

有限会社而立書房

一九八一年五月十五日 第一刷発行